

硬口蓋調音の多様性とその表記

—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察—*

鈴木 博之

キーワード：硬口蓋音、前部硬口蓋音、国際音声字母、カムチベット語

[要旨] 本稿では、硬口蓋における調音について、国際音声字母 (IPA) において登録されていない前部硬口蓋閉鎖音 [t, d] 及び同鼻音 [ɱ] の使用の妥当性と必要性を、主に雲南省で話されるカムチベット語の2方言の記述から具体的に示す。

1 はじめに

口腔内における調音器官において、硬口蓋は調音点として広範囲を含む部位のひとつであろう。それに対し国際音声字母 (以下「IPA」) では字母表において [c, ʃ, ɟ, ɕ, ʒ, ɟ̟] が登録され、欄外に [f] (硬口蓋入破音) と [ç, ʒ̟] (前部硬口蓋音) が登録されている。より詳細に調音点を示す必要がある場合、これらに補助記号を付加して表現することができる。

チベット語をはじめ、チベット・ビルマ系言語 (以下「TB 言語」) に属する言語の記述において、硬口蓋音の記述に対して [ç, ʒ̟] およびその破擦音 [tç, dʒ̟]、そして IPA に定義されないが中国の言語学で用いられる [ɱ] (前部硬口蓋鼻音) が頻出する。これらは音声学的にはそれぞれ [ç, ʃ, cç, ʒ̟, ɱ] ではなく、いくつかの言語 (方言) では前部硬口蓋音と硬口蓋音は確かに対立を形成する。前部硬口蓋音は IPA において摩擦音を表す字母のみが登録されているにとどまり、それ以外の調音方法については、原則的には補助記号を付加して表すことになるが、便宜的に硬口蓋音の字母で代用されることも珍しくない。中国の言語学では、前部硬口蓋音について IPA に定義されない音声記号が割り当てられ、その使用も行われているが、中国以外ではこれら IPA にはない音声記号を冷遇する傾向もあり、実際の発音はどうあれ、IPA に定義されない文字は使うべきでない、という原則論に立つ主張さえ見受けられる。

しかしそのような習慣や傾向は、ある種のチベット語諸方言の記述に確実に悪影響をもたらすことになる。前部硬口蓋音と硬口蓋音 (もしくは後部硬口蓋音) が摩擦音、破擦音以外にも弁別される方言が存在することが近年の調査によって分かってきたからである。IPA において、前部硬口蓋音について摩擦音を表す文字のみが登録されている現状は、前部硬口蓋における調音を認めながらも摩擦音以外の音を表記する手段を与えておらず、閉鎖や鼻腔共鳴を伴う場合に対応できない点で問題である。朱曉農 (2009:135) はシナ・チベット語の研究において必要な閉鎖音の目録を提出し、同時に明確に印欧語の音を出発点とした子音表と比較した場合の異なりを提示しているが、その記述を見れば、後者が主体となる IPA の体系そのままを TB 言語へ適用するだけでは不十分であることが明確に理解できる。

本稿では、IPA に定義されない前部硬口蓋に関する字母の使用の利便性と妥当性、そして記述研究上の意義を中国雲南省で話されるカムチベット語方言の具体例によって示すことを目的とする。

* 本稿の執筆に当たり、草稿段階において遠藤光暁、林範彦、藤原敬介の各氏から有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表す。

2 中国の言語学における硬口蓋音の音標文字とその問題

ここでは、まず中国の言語学における TB 言語の記述に用いられる硬口蓋音の音標文字について整理し、先行研究における音標文字の用いられ方を概観しつつ問題点を指摘し、ついで次節以降で用いる筆者の音表記について定義を与える。

2.1 記述において頻繁に用いられる文字

中国の TB 言語の記述において、硬口蓋をめぐる音表記に頻繁に用いられる文字には、以下のようなものがある¹。

	前部硬口蓋	硬口蓋
閉鎖音		c, ʃ
破擦音	tʃ, dʒ	cç, ʃj
摩擦音	ç, ʒ	ç
鼻音	ɲ	
流音		ʎ

このほかにも、やや古い文献では [t, d] が用いられているが、それが表す音価の定義はあいまいである。また、中国の言語学における TB 言語の記述で [j, ɲ] はほとんど用いられていないほか、流音の前部硬口蓋音を表す専用の文字は未見である。

2.2 先行研究に見られる問題

文字の形態から言えば、[t, d] は [ç, ʒ] に対応する調音点における閉鎖音と推測できるが、実際の文字使用を見れば、前者は [c, ʃ] と区別なく用いられていると判断できる事例がある²。たとえば、カムチベット語 Chamdo (昌都) 方言では、硬口蓋閉鎖音 [c^h, c, ʃ] をもつという記述 (格桑居冕・格桑央京 2002:75) と前部硬口蓋閉鎖音 [t^h, t, d] をもつという記述 (金鵬 1958:48) がある。筆者の調査では、同方言では硬口蓋閉鎖音 [c^h, c, ʃ] が用いられていることを確認したが、この先行研究ごとの記述の差異が生じた原因は実際のところ特定できていない。加えて Lhasa 方言の場合、さらに問題が複雑になり、金鵬主編 (1983:4) における「c, ch (または t, th)」という記述のほか、硬口蓋閉鎖音 [c^h, c] をもつという記述 (格桑居冕・格桑央京 (2002:7)、Tournadre & Sangda Dorje (2003:387-388)) と口蓋化軟口蓋閉鎖音 [k^{jh}, k^j] をもつという記述 (星 2003:xii) がある。筆者の調査では、同方言では口蓋化軟口蓋閉鎖音が用いられていることを確認した。これを考えると、[k^j] という音声に [t] (または /t/) が当てられているということにもなる。

また、[tʃ, dʒ] は [tç, dʒ] と書かれる場合がある³が、実際の発音は前者の方が正確である場合が少なくない。調音法の定義されている [ç, ʒ] に戻って考えると、これらの調音点は後部歯茎に程近い硬口蓋の前寄りの点と舌背で形成され、特に重要なのは舌尖が下を向いている点にあると言える。それに比べて対応する破擦音の場合、閉鎖を作る部位は舌背とともに舌尖がより後部歯茎に接近している点に特徴がある。閉鎖の開放とともに [ç, ʒ] の調音の態勢に入るのが多く観察される事例である。これは閉鎖と摩擦が同一の調音位置で行われていないことを意味し、一見より精密に見える [tç, dʒ] といった表記は必ずし

¹ 以下の表において、有声硬口蓋音破擦音が ʃj ではなく jʃ となっているが、実際に用いられるのは後者が圧倒的に多い。

² 金鵬 (1958:1, 3) では、チベット語 Lhasa (ラサ) 方言では /t/ を認め [c] が条件異音であるという記述をしているため、調音音声学上は [t] と [c] は区別されていることになる。

³ 星 (2003:xii) など。

も的確ではない場合があるということに留意する必要がある。

このことはすなわち、実際の調音動作として閉鎖音 [t, d] が頻繁に行われるものでないことも意味している。これらの音標文字を依然として後部歯茎に程近い硬口蓋の前寄りの部位と舌背で形成される調音点で発せられる閉鎖音を表すものであると定義すると、これらは [c, ʃ] と同一ではないし、その調音時には舌尖が下を向いているため、決して [t, d] の口蓋化を意味する [tʰ, dʰ] と同一でない⁴。[tʃ, dʒ] と [cç, ʃj] を混同する記述が存在しないのと同様に、[t, d] と [c, ʃ] は混同されてはならないといえる。そして、これと同様に、[ŋ] と [ɲ] は確かに調音点の異なる2つの独立した音価を表しているのであり、同一ではないから、後者を前者の代用として用いるのは音声記述上理にかなっていないとはいえない。

以上の議論に基づいて、本稿では閉鎖音、破擦音、摩擦音、鼻音について以下のように音標文字を定義する。

	前部硬口蓋	硬口蓋
閉鎖音	t, d	c, ʃ
破擦音	tʃ, dʒ	cç, ʃj
摩擦音	ç, ʒ	ç, ʃ
鼻音	ŋ	ɲ

前部硬口蓋音における調音動作は、硬口蓋の前寄りの部位と舌背で形成されるとともに、舌尖が下を向いていると定義する。硬口蓋音は硬口蓋の中央部から後ろよりにかけての部位と舌背で形成されると定義でき、舌尖は通常下を向いている⁵。

以上、TB 言語の記述で一般に必要とされる調音点を基礎に、硬口蓋における調音について「空き間」がある点に相応の音標文字を当てたわけであるが、これを利用する必要のある言語/方言が少数であれば、これらの音標文字の必要性があるといえる⁶。

3 新たに記述されたチベット語諸方言からの考察

本稿では、雲南省で話される主に2種のチベット語方言の事例を基礎に、上で議論した硬口蓋音をめぐって2つの問題を取り上げる。

チベット語の表記について、個々の分節音に関しては実際の発音をもっともよく表す IPA もしくは本稿で拡張定義した音標文字を用い、音連続に関しては鈴木 (2005) の表記法に準じる。超分節音 (声調) については別途表記法を与える⁷。

⁴ [c, ʃ] もまた [k, g] の口蓋化を意味する [kʰ, gʰ] と同一でない。

⁵ 音標文字の定義及びその字形には、中国で用いられているものを基本としている。一方、Canepari (1999) はイタリア語向けに IPA を拡張した音標文字 (*can IPA*) を提示しているものであるが、その子音表が Canepari (1999:556-557) に示されている。そこにおいて [t, d] (実際の字形は [t, d]) のように足が長く、その足の先端部分を丸める) は apico-palatale (舌尖硬口蓋音) とされ、異なる発音を表す。prepalatale (前部硬口蓋音) は [t, d] と表記される。ただし Canepari (1999:551) では prepalatale は postalveo-dorsali (後部歯茎舌背音) と呼ばれている。

⁶ 以上に述べた観点とは異なって、調音音声学の観点からまったく別個に音声記号を整理したものに、朱曉農 (2009) がある。同論文では筆者が以上に示した鼻音以外の音声記号が調音法とともに定義されているだけでなく、口腔内調音の全体像を示してある。なお、以下で議論される [t] 類については、少数の漢語方言にも見受けられる (朱曉農 2009:135)。

⁷ 本稿で扱うチベット語諸方言における声調は、すべて語声調で、語頭に以下の記号を付して表す。

ˀ: 高平 ˁ: 上昇 ˂: 下降 ˃: 上昇下降

3.1 [t, d] と [c, ʃ] の対立

前部硬口蓋閉鎖音/^ht, t, d/と硬口蓋閉鎖音/^hc, c, ʃ/とが対立する方言に Lamdo (浪都) 方言がある。Lamdo 方言は雲南省迪慶藏族自治州香格里拉県格咱郷浪都村で話される方言で、カムチベット語 Sems-kyi-nyila 方言群に属すると考えられるが、方言所属の下位区分について未決定である⁸。

Lamdo 方言では、以下のような対立例が見られる。

ʰta 「茶」
ʰca 「髪」

この両者は音声学上それぞれ [t]、[c] 以外の調音点と自由変異を見せることはほとんどなく、精密音声表記には補助記号を付加する程度で事足りる。先述のように、[t] は [tʰ] を含まないし、[c] は [kʰ] を含まない。言い換えれば、これらの音標文字を使用しなければ、音声記述は不適切になるといえる。

これらは後続する母音が前舌狭母音であっても、それぞれ [t] / [tʰ]、[c] / [kʰ] の対立が認められる。

ʰhɪ 「小便」
ʰhɪʔ 「チーズケーキ」
ʰce re: 「タオル」
ʰke rãʔ 「ベルト」

また、前部硬口蓋音は閉鎖音と破擦音も対立する。硬口蓋音はその対立がない。

ʰdə wa 「蚤」 ʰchə wa 「胆嚢」
ʰtə wa 「大便」 *cç 類 なし

さて、前部硬口蓋閉鎖音と硬口蓋閉鎖音の対立をもつチベット語方言は、現段階で筆者の知りうる限り、Lamdo 方言を除いて存在しない⁹。前部硬口蓋閉鎖音もしくは硬口蓋閉鎖音のどちらかが音体系に含まれる方言ならば、その数は少なくないが、前者をもつ方言はかなりの程度限定される¹⁰。Lamdo 方言の存在は、前部硬口蓋閉鎖音と硬口蓋閉鎖音が混同できない方言に対し、それに見合った音標文字の設定を要請する 1 つの事例となる。[t, d] と [c, ʃ] は、このような方言の記述のために正確に定義され、用いられなければならないといえる。

3.2 [n] と [ɲ] の対立

上に続き、Lamdo 方言では鼻音についても前部硬口蓋音/^hn/と硬口蓋音/^hɲ/とが対立する。

ʰnɔ 「ナシ族」
ʰɲo: pa 「速い」

以上の例に示すとおり、Lamdo 方言では初頭子音が前部硬口蓋鼻音と硬口蓋鼻音のみで対立を形成するペアがある。鼻音の場合でも、閉鎖音と同じく [n]、[ɲ] はそれ以外の調音点による自由変異を見せる

⁸ 筆者によるカムチベット語 (一部) の方言下位区分については、Suzuki (2009:17) を参照。

⁹ 中国側の先行研究でも報告されていないと見られる。cf. 張済川 (2009)。

¹⁰ 筆者の資料では、チベット語において前部硬口蓋閉鎖音は他に雲南省香格里拉県格咱郷納格拉村で話される Nagskerag (納格拉) 方言、四川省稻城县金珠鎮で話される nDappa (稻城) 方言、四川省若爾蓋県阿西茸郷で話される Askyirong (阿西茸) 方言に見られる。

ことはほとんどない。ただし、先の閉鎖音の事例と違って、初頭子音が鼻音のみにおける場合の対立のペアはきわめて少なく、例をさらに挙げるのは難しい。

さて、同様の現象について、Lamdo 方言に比べて発展途上段階にあるとみなすことができる方言に、sPomtserag (奔子欄) 方言¹¹がある。sPomtserag 方言は雲南省迪慶族自治州徳欽県奔子欄郷で話される方言で、カムチベット語 sDerong-nJol 方言群 sPomtserag 下位方言群に属する。この下位方言群に属する方言の地点は非常に少なく、点的な分布をなしている。

sPomtserag 方言では、前部硬口蓋破擦音 [tɕ^h, tɕ, dz] と硬口蓋閉鎖音 [c^h, c, ʃ] について対立が認められる¹²。硬口蓋閉鎖音は後部硬口蓋で調音される傾向にあるが、軟口蓋での調音と交替せず、[k^h, k, g] という表記は音声学的には適切性を欠いている。

^htɕa 「乗る」

ˈca 「茶」

ただし閉鎖/破擦音以外の調音法については硬口蓋内部における対立は現在のところ見られない。しかし有声の前部硬口蓋破擦音と硬口蓋閉鎖音に前鼻音がついている場合、事情はやや変わってくる。

ˈndze: 「変わる」

ˈɲɲ: 「升平鎮(地名)」

sPomtserag 方言をはじめ、Lamdo 方言も含む雲南省および同省に隣接する地域で話されるチベット方言には、鼻音を先行要素とする子音連続において2種類の対立が認められ、たとえば^mb/とmb/のように書き表している。前者は前鼻音部の聞こえが後続子音より軽微であるもので、後者はその聞こえに十分な継続時間があり、場合によっては鼻音の継続が延長し後続する閉鎖音部の聞こえが低くなるという現象が認められる¹³。

sPomtserag 方言の調査を進めていくと、壮年層以上では前鼻音つき子音であるものが、若年層での発音をみると鼻音のみになっている例が確認される。そしてそのような語では、若年層において前鼻音つき子音の発音が有標とみなされる。その中に先に挙げた2例が含まれ、実際には若年層では [ndz] と [ɲɲ] の部分がそれぞれ [nʰ], [ɲʰ] というように発音され始めているのである¹⁴。これら両者は未だ完全に鼻音化しているとはみなせないが、これらは完全に対立する要素として弁別され、調音の混同は許容されない。つまり、近い将来上の2例はそれぞれ /^hne:/, /^hɲe:/ として実現されるようになることが予測され、現在の発音の中に /n/ と /ɲ/ の対立を認める端緒が現れているといえる。

鼻音が有声閉鎖/破擦音に先行するこの種の発音様式は、Lamdo 方言にも少なからず確認される。以下のような例では、初頭子音について将来的に /n/ と /ɲ/ の対立になっていくことが予測される。

^hɬɔʔ [ˈ^hɬɔʔ, ˈndɔʔ, ˈn^hɔʔ, ˈnʰɔʔ] 「龍」

^hje: [ˈ^hje:, ˈɲje:, ˈn^hje:, ˈnʰje:] 「米」

¹¹ sPomtserag 方言については、鈴木(2009)を参照。同論文には2種の変種が収められているが、本稿では断りのない場合 sPomtserag/Shogsum (書松)方言の音形式を採用する。

¹² 張済川(1993:302)では、後者は硬口蓋破擦音とされているが、筆者の観察では閉鎖音のみが確認された。

¹³ 鼻音部の調音が後続子音より強くなる現象は、朱曉農(2007:10)で「後爆鼻音」と呼ばれるものに近いと考えられる。なお、朱曉農(2009:141)では、筆者の記述による^mb/とmb/をそれぞれmb/とm^b/のように書くことにしている。

¹⁴ この現象は壮年層で^hdz/, ^hʃ/と記述される一部の語にも見られる。

直前の2例の初頭子音は、基本的に前鼻音を伴う形式が単独で発音される場合に現れるが、話者によって差は大きいものの、発話速度が速い場合には鼻音のみになることもあるのが現状である。

チベット語諸方言を対照すれば、他の方言で前鼻音つき子音であるものが Lamdo 方言や sPomtserag 方言では鼻音のみになっている例が散発的にはあるが確認される。このため、以上の現象は前鼻音つき子音に由来する形式から各方言において別々に発展した形式と考えることができる。そしてこのような状況は、前部硬口蓋音と硬口蓋音が対立する方言で、なおかつそれらに先行する鼻音要素について2種類の発音様式が存在するかもしれないもしくは鼻音要素が十分な調音時間を有するタイプの子音連続を形成する方言であるという条件にあわなければ生じえない。前部硬口蓋音と硬口蓋音が対立する方言は少なくない¹⁵し、鼻音要素をめぐる上の記述に適合する方言も雲南省に分布するものを中心に、少ないとはいえない¹⁶のであるが、両者を兼ね備えているものとなると、Lamdo 方言や sPomtserag 下位方言群以外には見られないというのが現状である。

以上に述べた現象を的確に記述する場合、前部硬口蓋鼻音を表す文字が定義されていることが必要不可欠で、硬口蓋鼻音と完全に異なる調音であることが明示されなければならない。この意味で、[ŋ] という音標文字はこれらの方言の記述にとって必要とされているし、[ŋ] と [ɲ] は異なる調音を表すということを理解する必要性もある。

4 まとめ

本稿で主に紹介した2つのチベット語方言は、多彩な方言を抱えるチベット語の中の単なる2つの変種に過ぎない。しかしその中に見られる言語現象は、これまで IPA に定義されることなく、また中国においてもあいまいに用いられていた [t, d, ŋ] が重要な役割を果たすことを明らかにし、それらの使用が有益であることを示している。

確かに [t, d, ŋ] は IPA に登録されておらず、IPA に存在する文字に補助記号を用いて表記するのが筋であるという主張もあるかもしれない。しかし IPA を絶対視するのは明らかに問題がある。事実 Canepari (1999) や朱曉農 (2009) は IPA では対処しきれない音声現象の記述のために精密な調音法の定義とそれに耐えうる音標文字の必要性を主張している。本稿では、前部硬口蓋音と硬口蓋音の間に対立が存在するチベット語の2つの方言の記述に際して、次のことを定義した。

- 前部硬口蓋音とは、調音方法として後部歯茎から前部硬口蓋にかけて舌背と接近または接触させ、舌尖が下を向いている状態で行われるものをさす。
- [t, d, ŋ] はそれぞれ前部硬口蓋の無声閉鎖、有声閉鎖、鼻音を表し、[c, ɟ, ɲ] はそれぞれ硬口蓋の無声閉鎖、有声閉鎖、鼻音を表す。
- [t, d, ŋ] と [c, ɟ, ɲ] の関係は、IPA における [ç, ʝ] と [ç, j] の関係に並行する性格のものである。

以上、[t, d, ŋ] の調音音声学上の定義によって、前部硬口蓋音系列は IPA に元来ある [ç, ʝ] を加えて IPA の子音表の一部を構成するに足る字形を備えているといえる。[t, d, ŋ] を IPA に加え、かつその子音表を書き換えるための何らかの方策を考える必要性もあろう。

本稿の議論は一貫してチベット語方言の共時的記述に終始した。チベット言語学の分野では、チベット文語形式との比較を通じた通時的研究もまた要請される。前部硬口蓋音と硬口蓋音の来源を探る作業は稿を改め行いたい。

¹⁵ 筆者の調査では、前部硬口蓋破擦音 (tç 類) と硬口蓋閉鎖音 (c 類) が対立する方言が複数存在する。

¹⁶ ただし朱曉農 (2009:141) によると、「後爆鼻音」自体をもつ言語 (方言) は少ないという。

参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23
- (2009) 「カムチベット語奔子欄 [sPomtserag] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 4 号 219–258
- 星泉 (2003) 『現代チベット語動詞辞典 (ラサ方言)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Canepari, Luciano (1999) *Manuale di Pronuncia Italiana*, seconda edizione, Zanichelli
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report Vol.3*, 15–34, National Museum of Ethnology
- Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje [gSang-bdag rDo-rje] (2003) *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation*, Langues & Mondes — L'Asiathèque
- 金鵬 (1958) 《藏語拉薩日喀則昌都話的比較研究》科學出版社
- 金鵬 主編 (1983) 《藏語簡誌》民族出版社
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社
- 張濟川 (1993) 藏語方言分類管見 戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297–309 中央民族學院出版社
- (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社
- 朱曉農 (2007) 說鼻音 《語言研究》第 3 期 1–13
- (2009) 說阻音 《東方語言學》第六輯 123–150

[付記]

筆者による言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)

なお、調査に当たっては瑪吉阿米・香格里拉藏族風情宮 (昆明) の関係各位の協力を得た。Lamdo 方言の主な調査協力者はケゾン・ドマ [skal-bzang sGrol-ma] さん及びツェリン・ピンツォ [Tshe-ring Phun-tshogs] さんで、sPomtserang/Shogsum 方言の主な調査協力者はケゾン・チュドゥン [sKal-bzang Chos-sgron] さんである。